枕草子　清少納言　（第一段）

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

春は　明け方。　だんだんと　白んで　いく　山ぎわが、　少し　明る　くなって、　紫がかった　雲が　細く　たなびいている　（のは風情がある）。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

夏は夜。　月の頃は　言うまでもないが、　闇も　やはり、蛍が　多く　飛びかっている　（のがよい）。　また、　ほんの一、二匹　ほのか　に　光って　飛んで　いくのも趣がある。　雨など　が　降るのも　いい。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐこと　までも　しみじみとしたものを感じさせる。まして、雁など　が　列を作っ　て　行くというので、三、四羽、　二、三羽などと　いそぐ　さへ　あはれなり。

秋は　夕暮れ。　夕日　が　差して　山の端　に　とても　近づいた　頃に、　烏が　ねぐらへ

たるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

ているのが、たいそう　小さく　見えるのは　たいへん　おもしろい。日がすっかりしず　んでしまって、風の音、　虫の音など（がするのも）、これもまた、言いようもない　（ほど趣深い）。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。

冬は　早朝。　雪が降っているのは、言うまで　も　ない。　霜が　真っ白なのも、　また　そうでなくても、たいそう寒いときに、　火などを急いで　おこして、　炭を持って（廊下などを）通っていくのも、たいへん　似つかわしい。

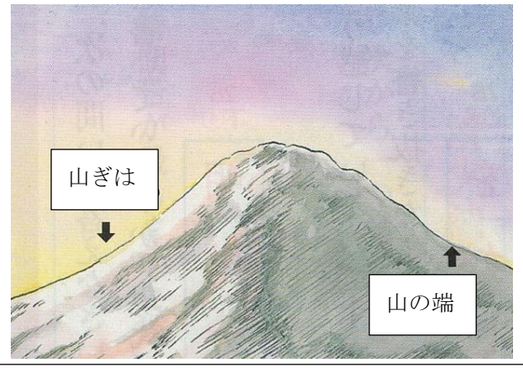
昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

昼になって、　（寒さが）だんだん　ゆるん　でいくと、　火桶の　火が　白い灰　ばかりになって、　好ましくない。

●夜明けの時間帯ごとの言葉

夜（暗）	夜明け	朝（明）
よる		
あかつき		
あけぼの・かたはれ		
あさぼらけ		
あした・つとめて		

●「山ぎは」と「山の端」の位置



●「烏」と「雁」

烏（からす）

雁（かり・ガン）

虫の音＝虫の鳴き声（鈴虫）

炭もて渡る＝寒い朝に暖を取るため、宮中の女房たちは、仕えている主人の所へ炭をもっていき、火桶の中に炭を入れる。そのために廊下を歩いている様子のことを指す。

火桶

炭

●良し悪しの段階

良　よし　よろし　わろし　あし　悪